



あさのあつこと編集者
名「バッテリ」になる秘訣

シリーズ累計900万部
ベストセラー「バッテリ」

1997年に「バッテリ」で野間
児童文芸賞を受賞した作家・あさ
のあつことさん。その後シリーズ化さ
れた「バッテリ」は、I・VIまで刊
行され、累計売上部数は900万
部を突破した。

天才ピッチャーとして圧倒的な
才能を与えられた少年・巧と、彼の
才能に惚れて野球を続けるキャッ
チャー・豪との運命的な出会いから
始まるこの「バッテリ」には、お互い
の気持ちをお互い合う中学生たち
の日々の悩みや葛藤が、「ピッチャー
とキャッチャーのペア」「バッテリ」
という「対」の関係を通して切々と描
かれていく。その人間関係のリアル
な描写は、小中学生だけでなく大人
の共感も呼び、幅広い層の人々から
支持を獲得した。昨年、滝田洋二郎
監督により映画化。今年4月からは
NHKでテレビドラマ化されている。

あさのあつことさんは、物語が醸し

何か足りないから物語を紡ぐ あさのあつことの 創作の原点

「書くこと自体が自分の支えになっていくんです」と話すあさのあつことさん。「書きたい」と思う、その強い気持ちはどこからやってくるのだろうか。人気シリーズ「バッテリ」をはじめ、少年たちを鮮やかに描いた作品を多数生み出す、あさのさんの創作の原点と、創作における編集者の存在について聞いた。



撮影が行われた豊科ゾクゾク倶楽部はあさのさんお気に入りのあさのあつことさんの家である。編集者としてのあさのさんによる、作家としてのあさのさんを使った、この対談の構成がオーストラリア

出すストイックな雰囲気とは、がらりと変わって、とても明るく気さくな人柄。インタビューも、軽快なテンポで進んでいった。

書いていないと
自分が自分じゃなくなる

あさのさんは、小説家ではなく、実は漫画家を目指していたという。あさのさんが小学生のころは、ちょうど「週刊少年サンデー」や「週刊少年マガジン」が創刊された時期。漫画が隆盛を迎えつつあり、周りは漫画家志望の友人ばかりだった。そんな中、あさのさんも漫画を描くが、小学校5、6年の時に絵がうまくなれないことに気づき、漫画家の道を断念。しかし、「不思議なことに、がっかりしなかった」という。

「今から考えたら、漫画を描くことよりも、物語のストーリーを考えるのが好きだったんだと思います。表現する方法はまだまだ他にもあるぞ、と感じていたのかもしれないぞ」。

あさのさんは小学生時代、あまり本を読まなかったというが、中学生の時に「シャーロック・ホームズ」に出会い、文字の力を実感する。

「小説を読んでいると、次々に映像が頭の中に浮かんでくるんです。漫画だったら、すでにキャラクターの顔、場面などは具現化されているので想像の余地が少ないのですが、小説は文字だけ。だから物語の世界が自分だけのものになるんですね。これは文字にしかない力です」。

その後アガサ・クリスティーなどのミステリーを読みあさるようになり、このころから、あさのさんは作家を目指すようになったが、それはずっと心に秘めたまま高校、大学に進学。その後、岡山市の小学校に臨時講師として就職し、2年後に結婚。3人の子どもを出産した。その間ずっと、あさのさんは「書きたい」という気持ちをお忘れた日はなかったという。

「書いていないと自分が自分じゃなくなる気がしたんです。十分恵まれた人生を送っていて、贅沢なことだ

とは思ってんですが、この気持ちは抑えられませんでした」。

その後、子育てが一段落したのをきっかけに執筆を開始し、児童文学の同人誌「季節風」に投稿。そして1991年に「はたる館物語」で念願の作家デビューを果たした。

どこかに欠落があるとして
書く原動力になる

ずっと「書きたい」という思いを、中学時代から温めてきたあさのさん。その強い気持ちはどこからくるのだろうか。「作家はどこかに欠落のある人がなるのではないか」という持論を持つあさのさんは、執筆に対する思いの原点を、こう振り返る。

「生まれた時に父から『男の子が欲しかった』とがっかりされ、さらに弟が誕生した時の父の喜び様を見て『自分の存在ってなんなんだろう』と思ったのが根本にあると思います。色々と気遣ってもらったはずなのに、それを感じ取るアンテナが鈍くなって、

書くことは、答えを見つける作業なんです。